

**現場で感じた  
国際協力の成果**

9 月初旬、二期の終わりに近づいたネパールの首都カトマンズ。この日は湿度がやや高く、外輪山の向こうに連なるヒマラヤも雲に隠れて見えない。今回の旅は首都から車で約3時間、クピンデ村という山あいの村から始まった。「ここで活動している日本人がいるんですね！」

そう話すのは、「なんとかしなきや〜プロジェクト」※1著名人メンバーの道端ジェシカさん。モデルとして活躍する彼女は、NPO法人国連UNCHCR協会の「毎月俱樂部」※2やチャリティオークションなどを通じ、ライフワークの一つとして国際協力に取り組んできた。「いつか現場に行ってみよう。今年9月、その願いがかない、ネパールへ降り立った。クピンデ村では、JICAの草の根技術協力事業を通じて、NPO法人ラプグリー

ンジャパンが農村開発プロジェクトを実施している。この地域でひとときわジェシカさんの目を引いたのは、プロジェクトの支援で農家の庭先に取り付けられたバイオガス発生装置。水牛のふんと水を混ぜて地下タンクでメタンガスを発生させる。「以前は炊事用のまきを1日何時間もかけて集めていました。今では簡単に火が使えるし、煙が目が痛くなることもない」と村人たちはうれしそうに語った。「環境に優しいだけでなく、家事をする女性たちの生活も楽に

障害のある子どもの指に絵の具を塗って、カードに絵を描くジェシカさんと黒川隊員(中央)



**特別レポート**

文・写真: 徳田小矢子 (JICA広報室)

**道端ジェシカさん**

**「ヒマラヤの国」の  
素顔を見て  
in ネパール**

難民問題に関心を持ち、洋服のリサイクルや寄付などを通じて、国際協力に取り組んできたモデルの道端ジェシカさん。いつか、自分の目で難民キャンプの現状を確かめたい。その強い思いが、彼女をネパールへと導いた。



児童の体重測定。栄養不足のため、発育状況はあまりよくない

ジェシカさんによるヨガの特別レッスン。まずは基本ポーズからコブラのポーズ。子どもたちも真剣

なる。地道な活動が着実に成果を上げていますね」と、ジェシカさんは笑顔を見せた。次に訪れた近郊の村のガネーシユ小学校では、JICAの「学校保健・栄養改善プロジェクト」の取り組みが行われていた。子どもたちの健康と栄養状態の改善を目指し、日本人専門家が教育省と保健省に働きかけ、定期的な身体測定や寄生虫対策などの定着を進めている。子どもたちの身長・体重・視力測定を手伝い、「日本の子どもと比べると明らかに体が小さい。栄養不足を実感しました。もっと支援が必要な分野ですね」とジェシカさん。それでも子どもたちは無邪気で元気いっぱい。3〜4年生を集めて開いたヨガレッスンでジェシカさん

んのポーズを一緒にまねする姿はなんともほほ笑ましく、先生たちも温かい目で見守っていた。

**海外で  
夢をかなえた若者たち**

ジェシカさんは、今回のネパール訪問で青年海外協力隊の存在にも心を動かされた。自分と同世代の日本の若者たちが、どのようなきっかけで海外ボランティアの道を選び、日々、何を思っているのか。ジェシカさんは彼らの活動先に足を運んだ。

障害のある子どものデイケアセンターでは、日本で理学療法士として経験を積んできた黒川めぐみ隊員が活動していた。ネパール式の理学療法は手足の曲げ伸ばしなどの体操が中心だが、これに加えて黒川隊員は図工や歌といった情操教育を取り入れているという。ジェシカさんは子どもたちの指に絵の具を塗り、その手でカードに絵を描くアクティビティを手伝った。重度の障害があっても、適切に介助することで楽しく活動に参加できる。「子どもたちの表情が見違えるように明るくなりました。絵を描く喜びが伝わってきますね」とその効果を実感していた。

首都近郊の農村で野菜栽培に携わる宮田典子隊員は、青年海外協力隊に参加するのが長年の夢だった。「大学で農学部に進んだのも、専門技術を身に付けたかったから。

価値観の違いに苦労することもあります。今はネパールで生活しているということに「幸せ」と語ってくれた。ジェシカさんは「途上国のために何かしたい」という、協力隊員のビュアな心と熱い気持ちは尊敬に値しますね。彼らの存在をもっと多くの人に伝え、サポートすることも自分の役割だ」と思う」と感銘を受けていた。

**初めての  
難民キャンプで見た現実**

そして、旅の最終目的地である難民キャンプへ。ネパールを訪れる日本人観光客は多いが、難民キャンプがあることを知っている人は少ない。ジェシカさんは自分が関心を持ち続けてきた難民問題について、その現実を自分の目で確かめたかった。

南東部で20年も難民生活を余儀なくされているのは、ネパール系ブータン人の人々。ブータン・ネパール両政府の間の協議は決裂状態で帰還できる目途が立たない中、2007年11月から第三国定住プログラム※3が進められている。第三国定住を控えた人々との会話を通じて、「帰れるものならブータンに帰りたい」という祖国への想いの強さを知りました」とジェシカさん。また、「キャンプの暮らしが楽になるよう、ソーラークッカーや街灯が設置されているのも確認できました。自分が今まで支援してきたことが、形になっているという手応えを得られたことがうれしです」と話した。

「途上国の現状に心が折れそうになるけれど、国際協力で携わる人々に出会い、少しずつでも確実に世界は変わっていついていると実感できました」とジェシカさん。「誰にでもできることがある。ヒマラヤの国、ネパールで見てきたことを、まずは身近な

**Jessica's photos**



難民キャンプ内の市場で野菜を売る女性たち

©Jessica Michibata



ヨーヨーをもらって遊ぶ難民キャンプの子どもたち

©Jessica Michibata



空港で第三国への旅立ちを待つ難民の家族

©Jessica Michibata

人に、そしてファンのみさんに伝えていきたいです。有言実行のジェシカさんは、テレビ番組や個人ブログ、ツイッターなどを通して、すでに発信を始めている。

※1途上国の現状を知り、一人人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会はNPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、国連開発計画(UNDP)、JICA。  
※2毎月の自動引き落としにより、難民支援のため自分の決めた額が寄付できる継続的な支援。  
※3ブータンへの帰還もネパールへの定住も選択できない状況の難民が、第三国(アメリカ、カナダ、オーストラリア、日本など)に移住する制度。